規子内親王に関する一考察

本橋裕美

はじめに

本稿では、村上天皇皇女で、徽子女王を母に持つ規子内親王について、その事績をまとめてみたい。

規子内親王の母である徽子女王は、醍醐天皇の皇子である重明親王の娘で、朱雀天皇の御代に斎宮に卜定され、伊勢に下った経歴を持つ。八歳で卜定されてから十年近くを斎宮として過ごし、天慶八年（九四五）に帰京、そののち村上天皇に入内している。斎宮経験者が天皇に入内するのは平安初期の朝原内親王以来のことである。徽子女王の父・重明親王は式部卿として皇族のなかでも比較的重く用いられた人物で、多くの后妃を抱える村上天皇後宮においても、徽子女王は文化的な意味で存在感のある女性だった。父譲りの琴の名手であり、和歌の才にも優れた徽子女王の逸話は多い。[注1] また、後述するように、斎宮経験者である徽子女王は『伊勢物語』のモチーフを自身に引きつけながら文学性豊かな交流を図っていた。斎宮経験を物語と重ね合わせて享受し、それを退下後も用いてサロンを形成したことは、斎宮の文学史において極めて重要な一場面となったといえる。

そうした徽子女王の思想は、娘であり、最終的に同じく斎宮となった規子内親王に対していかに発揮されたのか。『規子内親王前栽歌合』など、規子内親王に関わる和歌を中心に、その営為を探ってみたい。

【参考】徽子女王関係系図

醍醐天皇 ―― 村上天皇
　　└ 重明親王 ―― 規子内親王
　　└ 源某更衣 ―― 徽子女王
　　└ 藤原寛子（忠平娘）

一、規子内親王について

母である徽子女王についての論考は多いが、規子内親王に関して言及したものは少ない。所京子氏による斎王関係和歌の蒐集、西丸妙子氏による検討[注2]などが数少ない検討といえる。

所氏の把握によれば、規子内親王による和歌は十九首であるが、代作の可能性を指摘されることも多い。規子内親王について述べた文章を代表するものとして、山中智恵子氏の一節を挙げる。

清浄の一生を、母の庇護に生きたかのような規子内親王こそ、王族系、中皇命系の最高の文学、斎宮女御徽子女王の『斎宮女御集』を護る女神であった。[注3]

規子内親王が生涯のほとんどを徽子女王の庇護下に過ごしたことは間違いなく、風流人として名高い母の事績のもと、研究史においても「斎宮女御の娘」以上の注目を集めずにきた。実際、徽子女王が自作の和歌だけでなく『栄花物語』や『大鏡』などさまざまな文献に姿を現しているのに対し、規子内親王の人物像に迫る言及は皆無といってよい。こうした規子内親王への注目度の低さから、西丸氏は先掲論文で、

（『斎宮集』の―引用者注）徽子側の方の歌数をあげてみると、徽子の歌三十七首、規子の歌十九首、どちらか判断がつかない歌二十首となる。このように『斎宮集』にはかなり規子の歌が入っていると見なければならない。

と問題提起している。しかし、西丸氏の検討は結局、歌合を含め文学サロンの主催者として母・徽子女王があって、その徽子女王の意向によって「規子の存在の誇示」（西丸・先掲論文）が行われたという論に終着していく。

規子内親王から徽子女王の影を唯一払拭できるのは、『斎宮女御集』における次の一首である。

女御うせさせたまひてのち、さい院より御とぶらひの御かへりに、さい宮

影みえぬなみだのふちもころもでにうづまくあわのきえぞしぬべき

（『斎宮女御集』四）

「女御」は徽子女王のこと、「さい院」は大斎院選子内親王である。徽子女王の死に際した大斎院の弔問に対して応えた歌で、大斎院の詠歌はわからない。弔問であるので、文だけの可能性もあろう。規子内親王は母の死の翌年亡くなっているので、この歌が最後の詠である。母の死後の歌がないことを、母

の庇護下で安住していたことを示すものと見る向きもあるが、母の死から自身の死までちょうど一年、喪に服していたことを考えれば、たとえ優れた歌人であっても多くの歌を残すことは難しいだろう。

本稿では、『源氏物語』を媒介せずに、できるだけ規子内親王中心に、彼女を取り巻くものを見ていきたい。

二、規子内親王前栽歌合

『規子内親王前栽歌合』は天禄三年（九七二）八月二十八日に行われた歌合で、『女四宮歌合』や『斎宮歌合』『野宮歌合』の異名を持つ。女四宮・規子内親王を主催者に、判者を源順が務め、源為憲が記録を残している。序文は以下のとおりである。

① 斎宮に、男女房分きて、御前の庭の面に、薄・荻・蘭・紫苑・芸・女郎花・刈萱、瞿麦・萩などを植ゑさせ給ひ、松虫・鈴虫を放たせ給ふ。人々に、やがてそのものにつけて、歌を奉らせ給ふに、おのが心々我も我もと、あるは由ある山里の垣根に小男鹿の立ちより、あるは限りなき洲浜の磯づらに蘆田津の下り居る方をつくりて、草をも生ほし、虫をも鳴かせたり。御簾の中に仰せ言とて、「花の有さま、虫の住みかは、何れも何れもいとをかしかめり。歌の劣り勝りは定めでやあるべき。誰してか定め申すべき」と仰せ給ふに、此彼申す。「前和泉守源順朝臣なむ、公けの梨壺のは名五人が中に召され、宮にはおもと人は人うちに候ひし人なり。これを召してこそ定めさせ給はむやおよろしからむ」と申すによりて、「かねてその事とはなくて、ただ今宵過ぐまじきまめ事なむある」とて召したり。たみのつかさ、弾正台の大次官の君達、此方彼方に候ひ給ひ、加賀守橘正通に読み上げさせ、順朝臣にことわらせ、学頭為憲して、今日の事を書き置かせ給ふ。中に為憲なむ、言葉わく和泉のあたりに同じ源といふべくもあらず、千種に匂ふ花のあたりには□（も）（てへんに宛）ぎ木のやうにて、交り難く侍れども、やむごとなく候ふ深山の麓より生ひ出でたる草のゆかりにて、おほせ言の否び難さに、心も共に禿びにける水茎して、書き記し奉りおく、その歌ども、順朝臣の定め申さる判、かくなむ。

前栽歌合らしく、庭に歌題となる植物が植えられ、更に文台には洲浜が作られている。詳細な記録が残り、また左右の歌に対して判としての順の詠歌が載せられている点で注目されてき

た歌合である。

傍線部が「御簾の中」からの言葉であり、ここでは歌合開催の宣言が行われる。こうした「御簾の中」からの言葉は、本歌合の結びにも見られる。

虫の音　　但馬君かっ

あさぢふのつゆふきむすぶこがらしにみだれてもなくむしのこゑかな

橘正通

あきかぜにつゆをなみだとなくむしのおもふこころをたれにとはまし

この虫の音の歌、「露ふきむすぶこがらしの風」などいひつづけたるわたり、いひ馴れたりなど定むるほどに、正通が申すやう、「こがらしとは冬の風をこそいへ。このごろの風をいはば、雨をも時雨とやいふべからむ」と申すを聞きて、御簾の内にこれかれ「かかることは、古言をこそは例にはひかめ」とていひいだす。「こがらしの秋の初風吹きぬるになどか雲居に雁の音せぬ」また「我門の早生田の稲も刈らなくにまだき吹きぬるこがらしの風」などいへるは、冬の嵐を秋の初風といへるにやらむ。そのわたり定め申されよ」などあるにつけて、又又見給ふれば、

なくむしのなみだになせるつゆよりもつゆふきむすぶかぜはまされり

左方の勝利が決まったのちにも、

罷り出でなむとするほどに、御簾の内を聞けば、近衛将監丹治比のなかきといひし人の女、これかれなど候ひて、夜の更けゆくままに、さやけさまさる琴の音を調べあはせたり。御前の庭のおもを見わたせば、月の影のおぼろなるに、花のいろいろにうち乱れたり。風の音も夜寒になりゆくに、虫のこゑも鳴きあはせたり。かかることどもを聞きしのび捨てて、今はまかり出でなむやとて、さらに萩の下露に衣手の濡るるも知らず下りゐて、「大御酒給ぶなり」と聞こしめして、贄殿よりは皇女の宮の蔵人所の雑色藤原孝忠朝臣して、御果物のおろし、政所よりは、長門権守源有忠朝臣して、肴に給べきものどもを、くさぐさいろいろに給へり。

とある。ここでの「御簾の内（中）」は、敬語の問題からすれば、規子や徽子を直接指すものではなく、御前に侍る女房たちを指したものだろう。女房たちは左方の詠者であると同時に、歌の判をめぐる観客でもある。

こうした歌合の空間を作り出しているのはだれかという問題になると、先行研究の多くは徽子女王の主催であったというところに落ち着く。この時、規子は二十四歳で、年齢的には不可能ではないだろうが、身近に徽子女王がいる以上、その影響を否定することは難しい。徽子は、村上天皇の女御時代、数回の歌合を催している。全て確かめられるわけではないが、天暦十年（九五六）三月二十九日（当時の徽子二十八歳）、天徳三年（九五九）八月二十三日などが考えられる。天暦十年は同年に村上天皇の女御たちが歌合を繰り返しており、また天徳三年の例は、著名な天徳四年の内裏歌合とも無縁ではなかったと考えられよう。歌合の実質的な主催者はやはり徽子女王と見るほかない。源順の伺候も重明親王との縁あってのものである。

一方で、点線部に示したとおり、規子内親王の役割も軽んじられているわけではない。「「大御酒給ぶなり」と聞こしめし」たのは規子内親王である。眼前で繰り広げられる歌合を見、会のあとの宴を行う規子は、十分にホスト役を果たしている。

では、こうした歌合が行われた背景には何があったのか。規子内親王歌合に皇族関係者が多いことはしばしば指摘される。天禄三年は、康保四年（九六七）に村上天皇が崩御し冷泉帝が即位、安和二年（九六九）に源高明が左遷される安和の変、同年八月に冷泉帝が譲位し円融天皇の御代になったという政治的な変動を抱えている。「安和の変の後は世情不穏、藤原氏の専権露骨となって、一世二世の源氏も逼迫していた頃であるから、事は里第の華やかならざる環境の裡に、志を得ぬ中下流の文人歌人を集めて行われた、しめやかな秋の景趣にふさわしい私的密儀の歌合であったと思われる」（旧大系『歌合集』解題）という見解が大方の見方であると思われる。

しかし、徽子女王、規子内親王母娘にとってより重要であったのは、同じ天禄三年三月の資子内親王の次の記事ではないだろうか。

資子内親王、昭陽殿に於て藤花宴有り。天皇臨御。宴訖りて、内親王一品に叙す。（『日本紀略』三月二五日）

資子内親王は中宮・安子所生の皇女で、円融天皇の同母姉であり、規子内親王の異母妹にあたる。安子は村上天皇在位中に薨去しているため、円融天皇即位ののちは宮中で母代わりの尊崇を受けたとされる。この資子内親王への叙品は、母娘にとって大きな不満だったのではないだろうか。『本朝世紀』は規子内親王の薨伝を次のように記す。

五月十五日、朝間天陰。午後天晴。此日無品規子内親王薨。是村上帝皇女。伊勢斎内親王なり。

重明親王亡き後、ほとんど後見のなかった規子内親王は、経済的にはともかく政治的には不遇の身に終わったと考えられる。村上天皇の娘の多くは斎宮、斎院になっており（降嫁は二人）、天禄三年の時点で斎宮、斎院経験がなく降嫁もしていない内親王は、資子内親王（九宮）と規子内親王（四宮）、そして幼い選子内親王（十宮）のみである。にもかかわらず、資子に一品が叙されたことは、内親王としての格の差を絶対的に広げられたといえる。

ちなみに、円融天皇即位の時点で規子内親王に斎宮ないし斎院の可能性はあったことと考えられる。円融天皇の最初の斎宮は、章明親王の娘・隆子女王で、御代の最初の斎宮が女王であったのは宇多天皇以来である。年齢的に高いとはいえ、規子内親王が斎宮、斎院になる可能性は常にあった。有力な後見のない規子内親王が卜定を逃れてきたのは、斎宮生活の寂しさを知る徽子女王の抵抗があったためではないか。徽子女王が規子内親王の伊勢下向に先例を破って付き従ったのはあまりにも有名であるが、その際、円融天皇は引き留めの使者を送っている。徽子が、天皇からの直々の使者を振り払うことができた理由の一つに、円融天皇との間の確執を見ることも可能かもしれない。

前栽歌合の時期的な背景を鑑みれば、文人を巻き込んでの開催はつれづれの慰めに終わるものではない。この前栽歌合は歌論などにも用いられるが、そうして享受された理由は、記録が充実しているからである。先に挙げた序文に始まり、十番の歌合と歌と詞による判、宴会の様、さらに、歌合の翌日には源順の判詞に返した歌が記録者である為憲に届けられ、それらと合わせて歌合の日記としてまとめられている。つまり、規子内親王家で行われた歌合は、広く知られることを想定されたものであった。

序文の冒頭に①として傍線を附した「斎宮に」は、もとは「女四宮に」とあったとされている。[注4] つまり、村上天皇の女御であった徽子女王ではなく、円融天皇の異母姉である規子内親王のもとで行われた歌合であり、逆に、そこにこそ歌合の意義はあったのである。それは文人たちにしても同じことであって、村上天皇亡き後、源高明も失脚し、これから展開される藤原氏の政治に対して、文人なりの主張をする場として、この歌合はあったと考えられる。

しかし、規子内親王は結局のところ隆子女王の死を受けて卜定される。徽子女王や順、その他いろいろな思惑があった前栽歌合は、歌合の記録として珍重されるものとなって記憶に留め

られるのである。

三、二代の斎宮としての徽子女王、規子内親王母娘

規子内親王が斎宮に卜定されるのは天延三年（九七五）二月である。隆子女王が伊勢の斎宮で死を迎えるという重大事もあり、ほとんど選択肢のない中での卜定といえる。

斎宮卜定以後の規子内親王の代表歌は、『斎宮女御集』における次の贈答である。

もろともにくだり給ふ、すずかやまにて

よにふれば又もこえけりすずか山むかしのいまになるにやあるらん[注5]

みやの御かへり

すずかやましづのをだまきもろともにふるにはまさることなかりけり

（『斎宮女御集』二六三―二六四）

規子内親王の詠歌は、『伊勢物語』三二段の影響下にあると考えられる。

むかし、ものいひける女に、年ごろありて、

いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがなといへりけれど、なにとも思はずやありけむ。

徽子女王の歌の「むかしのいまに」という表現を受けて用いられたと考えられるが、三二段の内容としては響き合うものが少ない。「しづのをだまき」の用例自体は多いが[注6]、やはり斎宮ゆかりの『伊勢物語』という問題を引きつけて選ばれる語と思われる。あるいは、「昔を今になすよし」を持たない男の歌に対して、「むかしのいまになるにやあるらん」と過去の再現を実現した徽子女王を言祝ぐ歌として読めるだろうか。

規子内親王の詠歌は、恐らく次の徽子女王の歌を呼び起こしている。

大淀のみそぎにとかや

おほよどのうらたつなみのかへらずはかはらぬ松のいろをみましや

（『斎宮女御集』二六五）

「大淀の松」のモチーフは、『伊勢物語』七二段に見られる。

むかし、男、伊勢の国なりける女、またえあはで、となりの国へいくとて、いみじう恨みければ、女、

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪かな

七二段においては、男が伊勢へ帰ってくることはまずない。

『伊勢物語』が二度と帰ることのない空間として描いた大淀で、再び祓えをしている自分を昔男との相違の中で捉えている歌といえよう。西本願寺本の『斎宮女御集』はこの二六五番歌を最終歌とする。

こうした『伊勢物語』を背景にした詠歌は、伊勢と都との遣り取りでも用いられている。詠者がどちらかは断定できないものの、次の愛宮との贈答では東下り章段が用いられる。

伊勢より

ひとをなほうらみつるかなみやこどりありやとだにもとふをきかねば

おほむかへり　あいみや

とはねどもふかきこころはいせのうみのそこなるあまにおとりやはせし

（『斎宮女御集』七〇―七一）

「あいみや」、愛宮は源高明の妻で、多武峰少将高光の同母妹である。このほかにも交流が見られ、六八、六九番歌の贈答では琴の貸し借りがあったことがわかる。[注7]

ここで引かれる歌は、『伊勢物語』九段の「名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと」である。

次は、間接的な影響と思われる。表現技法の類似が指摘される。

しも月にさきたるむめを、人のたてまつれりければ

ふゆごもりゆきちるさとにおもなれてほころぶ花もしらずぞありける

女御

冬やあらぬはるやさきだつはなみればそらおぼめきもしつべかりけり

（『斎宮女御集』二四八―二四九）

ここでは、規子内親王が詠みかけ、徽子女王が返歌している。引かれているのは『伊勢物語』四段、「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして」である。恐らく伊勢での贈答であろう。厳密に『伊勢物語』の世界観を引くというよりは、伊勢という地で、『伊勢物語』を使った言葉遊びを楽しむ母娘の交流が窺える。

また、規子内親王は関わらないが、姪と思われる「大君」と交わした次の贈答にも、『伊勢物語』引用が考えられる。本文異同に不安はあるが（底本では傍線部が「さしぬくれの」となっている）、次の贈答である。

さらぬわかれのときこえたまひければ

おほかたのはかなきことはかぎりなくおもふがためにかな

しかりけれ

　こ君のことなどのたまはせて、大君に

月日こそあらぬそらなれなき人のおもかげのみぞかはらざりける

（『斎宮女御集』）

ここで用いられるのは、『伊勢物語』八四段「世の中にさらぬわかれのなくもがな千代もといのる人の子のため」である。『斎宮女御集注釈』によれば「こ（故）君」とは重明親王の息子で、徽子女王の兄か弟にあたる人物である。「大君」はその娘で、述べたとおり姪にあたる。なお、「月日こそあらぬそらなれ」に右の四段「月やあらぬ」の趣向を踏まえているという指摘もある。

『斎宮女御集』の中で、『伊勢物語』に言及しているものをいくつか抜き出した。このほかに、『伊勢物語』のなかでも六九段（狩の使章段）の和歌をモチーフとする著名な村上天皇との後朝なども挙げることができる。[注8]

徽子女王は、かなり積極的に『伊勢物語』の表現を用いているのではないだろうか。特に顕著なのは、実際に伊勢の地に再度下向してからの歌の数々である。「大淀のまつ」は居場所との連関が強いが、「しづのおだまき」、あるいは「月やあらぬ」など、『伊勢物語』の中でも伊勢とは関わりない部分まで、自由に用いているのである。この手法は、愛宮が東下り章段を用いて訴えかける方法と類似する。『伊勢物語』という作品が、伊勢という言葉の響き合いの中で徽子女王と強く結びつくのである。もっとも、愛宮には更に旅という共通項があり、徽子女王よりも引用として自然な流れではある。

徽子女王を取り巻く人々は、「斎宮女御」と呼ばれる徽子女王が、『伊勢物語』世界を好んで用いることを知っていたのだろう。『伊勢物語』を我が物として享受し、斎宮が深く関わる六九段（狩の使章段）だけではなく、むしろ六九段以外の章段を敢えて摂取する。こうした徽子女王の歌の世界に、規子内親王はよく呼応している。むしろ、規子内親王がともにいることで、徽子女王は言葉遊びを楽しむことができるようでさえある。他の斎宮が伊勢で詠んだ歌というのは、現存する限りでは多くない。徽子女王と規子内親王の歌が多く残るのは、やはり共有するものを多く持つ母と娘が連れだって滞在しているからであり、この二人の和歌を見る限りにおいては、伊勢の地の寂しさや京との隔絶などは感じ取れないのである。

おわりに

規子内親王は、徽子女王から和歌の薫陶を受けて育っている。和歌だけでなく、徽子女王が得意とした琴や貴人としてのもてなしなども、長い里邸での生活の中で伝えられたことだろう。徽子女王とほとんど離れることなく生きた規子内親王は、結局のところ、母から受けた薫陶のほとんどを母のために費やしたのである。徽子女王が好んだ『伊勢物語』も、ともに伊勢で暮らした時間があったからこそ二人の間で楽しめる媒体になったといえる。母娘がともに斎宮になる先例として、井上内親王、酒人内親王、朝原内親王の三世代があるが、酒人内親王や朝原内親王は、波乱に生きた井上内親王を影として背負い続けざるをえなかった。[注9] 一方の徽子女王、規子内親王母娘はいっそう密接である。規子内親王は母の影を背負うというより、母と同化するように傍にあった。徽子女王自身は、后妃を多く抱える村上後宮での葛藤、更に継母（重明親王の後妻）である藤原登子が村上天皇の寵愛を受けるという苦悩を抱えており、[注10] 幸福ばかりではなかったはずである。しかし、徽子女王はそうした葛藤や苦悩を規子内親王に受け継がなかった。やむを得ず斎宮になった時でさえ、ともに下向することで自身が感じただろう寂しさや不安を規子内親王に寄せ付けないのである。母の強い影響下に生きたことを規子内親王がどう捉えていたかはわからない。しかし、冒頭で示した規子内親王の母への哀悼歌には「影みえぬなみだのふちもころもでにうづまくあわのきえぞしぬべき」と、影だけでも見たいと願う母への愛着が詠み込まれる。規子内親王は、こののち一年も経たずに亡くなるのであり、規子内親王にとって母徽子女王を失うことは自身を失うのと同じほど、密接に結びついた存在であったことが窺われるのである。

※『斎宮女御集』の引用は『新編国歌大観』により、平安文学輪読会編『斎宮女御集注釈』（塙書房　一九八一）を参考にした。『伊勢物語』『大鏡』『栄花物語』の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）、『日本紀略』『本朝世紀』の引用は「国史大系」（吉川弘文館）によった。句読点など私的に改めた箇所がある。

注

（1）『大鏡』「道長」には、徽子女王の逸話として村上天皇との次の遣り取りが挙げられている。

いとせちにやさしく思ひたまへしことは、この同じ御時のことなり。承香殿の女御と申ししは、斎宮の女御よ。帝ひさしくわたらせたまはざりける秋の夕暮に、琴をいとめでたく弾きたまひければ、急ぎわたらせたまひて、御かたはらにおはしましけれど、人やあるとも思したらで、せめて引きたまふを、聞こし召せば、「秋の日のあやしきほどの夕暮に荻吹く風の音ぞ聞こゆる

と弾きたりしほどこそせちなりしか」と御集にはべるこそ、いみじうさぶらへ（三八二）

琴と歌に優れた徽子女王のイメージが形成される場面である。

（2）所京子『斎王和歌文学の史的研究』（国書刊行会　一九八八　初出一九八三）、西丸妙子「女御徽子ならびに娘の規子内親王の交友関係（一）」（『福岡国際大学紀要』七二〇〇二）。

（3）『斎宮女御徽子女王』（大和書房　一九七六）。

（4）旧大系『歌合集』、所氏先掲著。

（5）『拾遺和歌集』（巻八　雑歌上　四九五）には単独で載る。

（6）参考歌として、「いにしへのしづのをだまき賤しきもよきも盛りはありしものなり」（『古今集』巻一七　雑歌上八八八）を挙げる。

（7）愛宮の兄多武峰の君については、二三一番歌にも名が見える。西本願寺本は「かりのよをそむきはてにしかひもなき人はうつつかゆめかえこそさだめね」であるが字余りで、小島切が「かりのよをそむきしかひもなき人はゆめかうつつかえこそさだめね」とする方が繋がりが自然である。

（8）本稿は規子内親王を中心に論じたため、この後朝の場面については触れるに留めるが、徽子女王が『伊勢物語』の斎宮と自身を重ねる回路を持っていたことは明らかである。

まゐりたまひてまたの日
おもへどもなほもあやしきあふことのなかりしむかしかでへつらん

御かへし

むかしともいまともいさやおもほえずおぼつかなさはゆめにやあるらん

（『斎宮女御集』五―六）

（9）聖武天皇皇女である井上内親王は白壁王（のちの光仁天皇）に配されて酒人内親王、他戸親王を生むが、呪詛事件により廃后、不審な死を遂げている。酒人内親王は呪詛事件の時期に斎宮に卜定され、退下ののちは桓武天皇に入内し、朝原内親王を産んでいる。朝原内親王もまた斎宮として伊勢に下向したのち、平城天皇のもとに入内したが、最終的に妃を辞している。詳細は稿を改めるが、斎宮退下後に入内する例、また母娘で斎宮を経験する例は、井上内親王の事例に重ねる限り不穏なものである。規子内親王の下向に徽子女王が付き添い、任を全うしたことは井上内親王以下の不穏な先例を払拭するものであったといえるが、徽子女王がそれをどのような論理で為し得たかについては更に論を重ねていく必要があると思われる。

（10）『栄花物語』巻一「月の宴」には、「式部卿宮の北の方は、内裏わたりのさるべきをりふしのをかしきこと見には、宮仕ならず参りたまひけるを、上はつかに御覧じて、人知れず、いかでいかでと思しめして、后に切に聞えさせたまひければ、心苦しうて、知らぬ顔にて二三度は対面せさせたてまつらせたまひけるを、上はつかに飽かずのみ思しめして、つねに「なほなほ」と聞えさせたまひければ、……」（三五）とあり、村上天皇の登子への執心は、登子の姉で中宮である安子なども巻き込んだ問題の多いものとして描かれている。重明親王存命中からの執心であり、徽子女王にとっても好ましい事態ではなかった。

本研究はJSPS科研費 20K12923の助成を受けたものである。